

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

泉麻人 コラムニスト

Asato Izumi / Columnist



CREATOR^{No}
INTERVIEW 82

泉麻人 Asato Izumi

1956年東京生まれ。慶応義塾大学商学部卒業後、東京ニュース通信社に入社。『週刊TVガイド』『ビデオコレクション』の編集者を経てフリーに。テレビ番組から映画、音楽まで懐かしい昭和の文化に精通し、様々なメディアにコラムを発表する一方、テレビにも出演し、コメンテーター、司会などを務める。著書に『昭和40年代ファン手帳』『選歴シェアハウス』『大東京23区散歩』『東京いい道、しぶい道』など多数。

クリエイターインタビュー

『六本木の全景を捉える、街歩きの未来。』

過去から学び、路地裏を歩きながら、
六本木の新しい地図を作る。

photo_yuta nishida / text_nanae mizushima

幼い頃から地図が好きで、その地図を片手に街歩きを重ねてきたコラムニストの泉麻人さん。ビルの狭間や路地裏を好んで歩き、いわゆる一般的なガイドブックからは溢れ落ちてしまう風景を独自の視点ですくいあげては、私たちに新しい東京の魅力を見せてくれる、いわば街歩きのスペシャリストです。そんな泉さんに街歩きの視点から垣間見る東京、そして六本木の街の魅力や可能性を伺いました。

山手線内側と外側の違い。

東京生まれ、東京育ちの僕の地元は新宿区の中落合。30歳の頃までこの街で暮らしていたんですが、幼い頃は自宅から都心までの距離がとても遠く感じていました。というのも今から約50年前の東京は、山手線の内側と外側の景色に格段の違いがあったんです。今でこそ高層ビルや路地裏に広がるネオン街は、よくある東京の風景の一部ですが、その当時は山手線の外側にはない風景だったんです。だから両親と銀座に出かけたときにはすごく高揚しました。これが東京なんだ、と。絵本の中でしか見たことのなかった風景が銀座には広がっていたんです。

今は都内であればさほど風景に差を感じなくなりましたが、沿線ごとに街の性格は違って、それが東京の魅力の一つだと思います。東京はいろんな人に寛容で、多様性に満ちている。だから僕自身は東京の街でここが一番、という場所は特にないんです。どこもそれぞれに味わい深いから。

ただ、どの街に行っても共通していいな、と思うポイントがあります。それは戦前の古い洋館とか、この時代の建物がまだここに残っているんだ、といったものを思いがけず発見した時です。やっぱり僕自身が60代になったこともあって、惹かれるものは渋い造りをした町医者や理髪店とか、郷愁漂う建物が多い。

見つける度に入っていてじっくり眺めたいと思うのですが、それこそ診察をしてもらう、髪を切ってもらおうとかしない限りのぞくことができないので、それがすごくジレンマでもありますね（笑）。

街もまた、人と同じ生き物であるということ。

幼少期に親しんだ建築物にどうしても惹かれてしまうので、ひと昔前に街全体が高度経済成長期を経て、ニュータウンとして変貌していく姿を目の当たりにしたときは、正直苛立ちもありました。でも時が経つに連れて、気持ちもまた変化していくものです。

例えば 東京オリンピックを翌年に控えた1963年に、日本橋の上に首都高速道路の都市環状線が走りました。当時は空に蓋をされたような感じがしてショックでしたけれど、時が経てばそれなりにクラシックな趣が出てきて、親しみが湧いてきます。団地なんかもまさにそう。近代化の象徴でありトレンドでもあった大型団地は僕自身にとっては正直、日本屋敷に比べると無粋な感じがしていました。でもこうして30、40年経つと、建築物としての味みみたいなものが出てくるから不思議です。

要は街もまた人と同じ生き物なんですね。変わりゆく中で、人に与える印象も違ってきますし、その都度、発見や面白さを見い出せる瞬間がある。その瞬間をどれだけ見つけられるのか。見つけるための目を養うためには、やっぱり自分でいろんな道を歩いてみることでしか得られないことがたくさんあります。



泉麻人 コラムニスト
ASATO IZUMI / Columnist

photo_yuta nishida / text_nanae mizushima

路地裏から見る街のランドマーク。

今の六本木にも、僕は好きな風景があります。六本木ヒルズに程近い東京の山の手の丘陵地に「がま池」という小さな池があるんですが、このがま池は、江戸時代に主人を火事から守ったという「がま池伝説」が今に言い伝えられている、このあたりではちょっと有名な池で、あのNHKの番組「ブラタモリ」でも紹介されていました。

現在がま池はマンションの敷地内にあるため、住人以外は敷地外からしか見ることはできませんが、僕はちょうどこの池の辺りから望む六本木ヒルズが好きなんです。

そもそも六本木と元麻布周辺は山の手台地と低地の境目の地域にあり、坂が多い街です。道源寺坂、なだれ坂、芋洗い坂、狸坂など、一步裏に入れば歴史のある坂がたくさん点在していて、そういった坂を含めた路地裏から街のランドマークを望むとまた、街の印象は全然変わります。

路地裏の間隙からによき顔を出す東京ミッドタウンや東京タワーを眺めてみる。するとこういう見かたがあったんだ、と自分の世界がちょっと広がるんです。つまり視座、視野、視点をどう持つのかによって世界は変わっていく。そういう街歩きが僕の基本だと思います。

がま池

江戸時代、備中国成羽の領土・山崎家の屋敷内にあったがま池は、その当時約500坪の面積を誇っていた。その後、大火で周辺の屋敷が全て焼けても、山崎家の屋敷だけは燃えなかった。それはこの池の大きなガマガエルが水を吹いて火を消したためであるという伝説が残っている。現在、池は少しずつ埋め立てられ、マンションの中庭の一部となっている。

「ブラタモリ」

地形好き、地学好きのタレントタモリが、「ブラブラ」歩きながら知られざる街の歴史や人々の暮らしに迫る、NHK総合テレビの人気紀行番組。2008年から放送がスタートした本番組は現在、第4シリーズ目に突入。東京限定だったロケ地は、第4シリーズから全国に拡大している。
<http://www.nhk.or.jp/buratamori/>

迷子になるのもまた、散歩の醍醐味。

街歩きの基本といえば、やっぱり地図の存在は欠かせません。僕は幼い頃から地図を読むのが大好きな子どもでした。いつも地図を片手に近所の道をうろろう。この道は一体どこに繋がっているのだろうか？ということが気になって仕方がなかったんです。

そこから本格的な街歩きに発展したのは、小学5、6年生の頃。バスが大好きで、降りたこともないバス停を降りては周辺をうろろうし、自宅に帰れば、初めて降りたバスの停留所の名前を地図に書き込んだりして、自分だけの地図を作り上げていました。

あと、その当時中学受験を控えて進学教室に通い始めるんですが、教室が丸ノ内線の沿線にあったんですね。だから沿線上にある駅を降りては歩いていました。よく降りていたのは淡路町駅。そこから歩いて神保町まで行って古本屋巡りをしたりして。過去の歴史を調べることも大好きだったから神保町の古本屋で古い雑誌や新聞の記事を集めたりしながら、東京の歴史や文化をいろんな角度から調べたりしていました。

コラムニストとしての原点は、まさにこの頃にありますね。その後、社会人になって泉麻人というペンネームを使って、コラムニストとして独立したのは1980年のこと。まだ発行されたばかりの雑誌『STUDIO VOICE』の中で「ミーハーチックな夜が好き」というこれまた軽薄なタイトルのもと（笑）、東京のあちこちの街を歩きながらメインストリートにはない路地裏カルチャーのエッセイを書かせてもらったのが、独立後の初仕事だったと思います。

赤坂へ行くつもりが気づいたら麻布十番に行ってしまうていた。なんてことがその連載中、頻繁にありましたけれど、でもそういうことこそが街歩きの醍醐味でも思うんですね。



自分だけの地図

泉さんが小学生（高学年）の頃に愛用していた日地出版の各区分の地図。「とくに近所の中野区や練馬区の地図には、ぬけおちているバス停の名前を書き入れて満悦していました」とのこと。



「STUDIO VOICE」

カルチャー雑誌の先駆けとして1976年に創刊し、毎号異なる切り口の特集や斬新な誌面デザインが若者を中心に共感を呼び、日本のカルチャーシーンを牽引。その後発行部数の低迷などを理由に、2009年8月6日発売の同年9月号（通巻405号）をもって休刊。以後はオンライン版のSTUDIO VOICE ONLINEの編集を継続させつつ特別号を単発で発行していたが、2015年4月20日発売の同年5月号にて、6年ぶりにリニューアル復刊し、現在年2回のペースで発行中。
<http://www.studiovoice.jp>



泉麻人 コラムニスト
ASATO IZUMI / Columnist

photo_yuta nishida / text_nanae mizushima

六本木、昼と夜。

僕にとっての六本木の原風景といえば、東京タワーかな。高校 2、3 年の頃に、六本木交差点から口アビルの方に向かって歩いていく道の途中で見える東京タワーを見て、なんとも感慨深い気持ちになりました。

その当時の六本木は六本木交差点を中心に繁華街が形成されていましたが、昼と夜の街の風景にはちょっとギャップがありましたね。昼は今の原宿に少し近いというか、文化的な趣味嗜好の小さなお店が散らばっていたんですよ。そこをうろろしたり、あとはハンバーガーショップの「ザ・ハンバーガーイン」か喫茶店「クローバー」が僕の憩いの場でした。

一方で夜になるとディスコやロックバーが若者たちの溜まり場に。友人たちとはしごしながらその途中に横目で見えるライトアップされた口アビルがまるで白亜の城のように輝いて見えていたこともよく憶えています。そして六本木のはずれ、飯倉片町にはイタリア料理店キャンティ。多くの著名人が夜な夜な集うキャンティの前にはオープンカーがずらりと並んでいて、その光景も若い僕にはカッコよく映っていました。

その後 1980 年代後半に入ると、時代はバブル全盛期に。六本木交差点から六本木通りを溜池方面に向かう途中にできたスクエアビルは、10F 建てのフロアのほとんどがディスコで埋まっていた、まさに当時の六本木のランドマークのような存在でした。そんなディスコ夜遊び組みとは別に 1983 年、六本木 WAVE ができてからは、カルチャー好きの若者たちが六本木に多く集っていましたね。スクエアビルか六本木 WAVE か。青春時代にここで過ごしたという著名人もきっと多いと思います。

「ザ・ハンバーガーイン」

1950年、当時マッカーサー元帥の給料計算をしていたアメリカ人、ジョン・S・ウェッツスタインが日本初のハンバーガー店として飯倉片町にオープン。創業当時はまだ丸い「バンズ」が日本には無く、耳を落とした食パンが代用されていたのは有名な話。アメリカの味、文化を人々にいち早く届けた「ザ・ハンバーガーイン」は、その後、50余年に渡って六本木を代表するレストランとして営業を続け、2005年10月に閉店した。

個人の動機が街を変える。

いろんな時代を経て今、六本木のランドマークと言えば、東京ミッドタウンや六本木ヒルズが欠かせませんが、人々の目的や行動がそこに集約されていくことで、街全体は少し空洞化している印象も正直あります。つまり六本木の全景が捉えられていないような感じがするんです。

例えば東京ミッドタウン、六本木ヒルズ、芋洗坂とか、もっといろんな道、スポットをつないでいくことで、人々の六本木への目線や目的が広がっていくといい。

そのための一つとして、ユーザー側から街が盛りあげていくことが大切だと思います。東京ミッドタウンが建っているこの場所は、もともと防衛庁の檜町庁舎でしたけど、彼ら御用達のバーや喫茶店が少しずつ生まれるなかで街が賑わっていったように、これからの時代は小さな単位、個人的な動機を入口に六本木が変わっていったらすごく面白いと思います。そういった意味では六本木は今、画廊やギャラリーが少しずつ増えてきているようなので、そこに僕は期待したいですね。

未来は過去とつながっている。

いい街にはいい道が必ずありますが、僕にとっていい道とは渋い道で、例えばタクシーに乗って外苑西通りで渋滞しているときに、運転手さんが「いい道あるんですよ」って言いながら車では走りづらそうな裏道に入ってくれるときがあるでしょう。そういうニュアンスですね。そしてその裏道的なもの、時には横道に逸れる方がいいねというセンスもまた、日本人にはあると思うんです。

いい道といえば、渋谷は面白いと思います。坂の多い東京の中でも渋谷は地形的に起伏が激しく、スクランブル交差点を谷底としてそこから放射状にどこを歩いても凸凹地形なので裏道、横道にそれやすく、結果として渋谷の文化を濃くしているのはこの地形が関係していると思います。

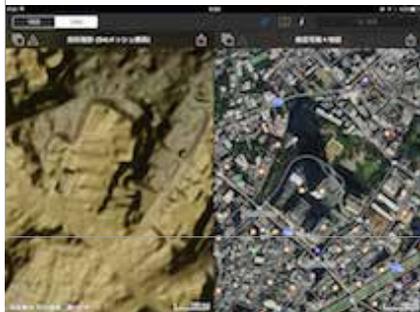
渋谷駅は今、大規模なリニューアルを図っていますが、未来の渋谷駅はどんな姿になっているでしょう。

そもそも東京の未来を思う時、僕は地下街の発展が気になります。新宿駅の地下街や東京駅の八重洲地下街なんかを見ていても、すごい広さでしょう。幼い頃に観ていた「ウルトラマン」に地底人が登場するんですけど、その当時は地下空間で過ごすなんてSFの世界でしたが、今はこうして現実のものになって、多くの文化を生み出しています。六本木の営みもまた、これからは高層ビルを建てるといった、上に積み上げていくだけでなく、地下もまた大きな可能性になっていくのでしょうか。

何れにしても未来を考える上で、過去とのつながりはやっぱり大切だと思います。身近なところでいうと、古い地図を持ちながら道を歩くとそれを実感します。東京時層地図というアプリがおすすめで、これは散歩しながらその場所の明治から昭和期の古地図を見ることができるんです。自宅の周辺を始め、それこそ六本木の今と昔を見比べるだけでも新しい六本木をきっと発見できます。ぜひ試してみてください。道に迷いながらね（笑）。



iPad 版 (左) 航空写真+地図 (右) 文明開化期



iPad 版 (左) 段彩陰影 (右) 航空写真+地図



iPhone 版 高度成長前夜

東京時層地図

明治から現代までの時間を軸に、東京の変遷を知ることができる地図アプリ「東京時層地図」。表示できる地図は、7つの時期（文明開化期、明治のおわり、関東地震直前、昭和戦前期、高度成長前夜、バブル期、現代）に航空写真や地形等を加えた19種類。古地図はGPS情報と対応しているので、現代との比較も簡単にできる。めまぐるしく変化を遂げていった東京の姿をこのアプリを持って歩けば、じっくり見つめ直すことができる。※東京時層地図は、App Store からダウンロードできる。販売元：Japan Map Center, Inc.

取材を終えて

快適で便利な暮らしをする中で、どんどん無駄は省かれ、効率化することばかりに意識は向きがちですが、泉さんの街歩きの考え方を伺う中で、一見無駄に見えるものにこそ、大きな発見や人生のヒントが詰まっていることを改めて気づかされました。普段道を歩くときも、時には路地裏に迷い込んだり、立ち止まったりしながら、そこから見える景色を楽しむこともしたいと思います。つまり最短ルートを歩くことだけが、ゴールじゃないということ。どうせなら、中身の充実したゴールを目指したいものです。(edit_nanae_mizushima)